

【原文一】

請問陽何從獨得尊而貴、陰獨名卑而賤哉。神人言、陽所以獨名尊而貴者、守本常盈滿而有實也。陰所以獨名卑而且賤者、以其虛空而無實也、故見惡見賤也。

夫陰陽男女者、本元氣之所始起、陰陽之門戶也。人所受命生處、是其本也。故男受命者、盈滿而有餘、其下左右尚(各)有一實。上者盈滿而有餘、常施下陰、而積聚有餘。上施者(應)太陽行也、無不生、無不能成。下有積聚者太陰應地、而有文理應阡陌。左實者應人、右實者應萬物。實、核實也。則仁好施、故陽得稱尊而貴也。

女所以卑賤、其受命處、空而虛、無盈餘又無實、故卑也。故天道重本守始、故當反本守元、正守(「字」)考文以解迷惑也。故能使天長地久安國寧民、而陽實好施故也。陽、天也、君也。陰、地也、臣也。故敬陽之施、因而養之。

【校勘】

『太平經合校』卷九十三己部之八 陽尊陰卑訣第一百三十八

- 請問…經「願問」
- 神人言…經にはない。
- 陰所以獨名卑而且賤者…經「陰所以獨名卑且賤者」
- 夫陰陽男女者…經「夫天名陰陽男女者」
- 故男受命者…經「故男所以受命者」
- 其下左右尚有一實…經「其下左右尚各有一實」
- 常施下陰、而積聚有餘…經「尚常施與下陰、有餘積聚而常有實」
- 上施者太陽行也、無不生無不能成…經「上施者應太陽天行也、無不能生無不能成」
- 下有積聚者太陰應地…經「下有積聚應太陰應地」
- 實、核實也…經「實者、核實也」
- 則仁好施、故陽得稱尊而貴也…經「則仁好施，又有核實也，故陽得稱尊而貴也」
- 女所以卑賤、其受命處、空而虛、無盈餘又無實、故卑也…經「陰爲女，所以卑而賤者，其所受命處，戶空而虛，無盈餘，又無實，故見卑且賤也。」
- 故天道重本守始…經「故天道重本守始，是以聖人睹天法象明」
- 正守考文以解迷惑也…經「正字考文以解迷惑也」
- 故能使天長地久安國寧民、而陽實好施故也…經「故能使天地長安，國家樂也，故守

本而有實、好施與者爲善人」

- 陽、天也、君也。陰、地也、臣也。故敬陽之施…經「陽乃天也、君也；陰乃地也、臣也。故重尊敬陽之施」

【書き下し文】

「請いて問う、陽何より獨り尊にして貴きを得、陰獨り卑にして賤しきと名づけんや」と。神人言う、陽獨り尊にして貴と名づける所以は、本を守りて常に盈滿して實有ればなり。陰獨り卑にして且つ賤を名する所以は、其の虚空にして實無きをも以て、故に惡と見、賤と見ればなり。

夫れ陰陽男女は、本より元氣の始めて起こす所、陰陽の門戸なり。人 命を受けて生まるる處の所は、是れ其の本なり。故に男にして命を受くる者、盈滿して餘有り、其の下、左右尚ほ各おの一實有り。上なる者は、盈滿して餘有り、常に下陰に施し、而して積聚して餘有り。上施なる者は、太陽の行りに應じ、生ぜざる無く、成す能はざる無し。下の積聚なる者、太陰、地に應じ、而して文理有りて阡陌に應ずる。左に實たす者、人に應じ、右に實たす者、萬物に應ず。實は、核實なり。則ち仁もて施しを好み、故に陽は尊にして貴を稱するを得るなり。

女の卑賤なる所以、其の命を受く處、空にて虚、盈餘無く又實無し、故に卑なり。故に天道 本を重んじて始まりを守り、故に當に本に反し元を守り、字を正して文を考え、以て迷惑を解くべしなり。故に能く天長く地久しく、國を安んじて民を安んぜしむ。而して陽實施しを好むが故なり。陽、天なり、君なり。陰、地なり、臣なり。故に陽の施しを敬し、因りて之を養う。

【現代語訳】

「教えを請います。どうして陽だけが尊貴であることができ、陰だけが卑賤と稱されるのでしょうか」。神人はこう言った、「陽のみ尊貴であることができる理由は、根本を守り常に充滿していて實があるからである。陰のみ卑賤と稱されていることは、虚しく空っぽで實がないからであり、そのため、惡とみなされ、賤しいとみなされるのだ。

そもそも陰陽男女というのは、ほんらい元氣が始めて起こしたものであり、陰陽の門戸である。人が命を受けて生まれるのは、その根本である。そのため、男として命を受けたものは、(陽氣が) 充滿してあまりがあるので(身體の) 下部に、左右それぞれに實がある。(陽氣のように) 上るものは、充滿してあまりがあり、よく下の陰に施し、(氣を) 集積してあまりがある。上に施すものは、太陽の運行に應じるため、生じないことなく、成

すことができなことがない。下に集積したものは太陰であり、地に應じ、その文理は南北に交差する道筋に相應する。左にある實は人に應じ、右にある實は萬物に應じる。實は、核實である。すなわち仁は施すことを好むので、そのため陽は尊貴を稱されることができるのである。

女が卑賤とされる理由は、その命を授かるころは、空っぽで虚ろとなっており、満ちてあまりあることもなく、實もないからである。そのため卑ちされる。

そのため、天道は根本を重んじて始まりを守り、そのため根本に歸り、元始を守り、(圖書に書かれた)文字を正しくて文章を考察し、迷いを解決するべきである。そのため、天は長く地は久しく、國と民を安定させることができるのは、陽實が施しを好むおかげである。陽は天であり、君である。陰は地であり、臣である。陽の施しを敬い、それで養うのである」と。

【注釋】

○盈滿

『老子』第5章「大成若缺、其用不弊。大盈若沖、其用不窮」。

○受命生處

『太平經』卷四十五起土出書訣第六十一「子者、受命於父、恩養於母」。

○仁好施

『春秋繁露』王道通三「人之受命於天也、取仁於天而仁也」。

『太平經』卷一百三十七至一百五十三壬部不分卷「故生者象天、養者象地、施者象仁。此三者、天地人之大綱也、過此而下者、但備窮乃後用之耳」。

【原文二】

請問神人、天下凡有幾國、然中部八十一域、次其外復一周、天下有萬國、遠出到洞虛無表、竝合三部爲萬二千國、皆稟受太平之教。今太平一歲、人爲喜樂順善。二歲地上爲大樂。三歲恩澤究洽於天下。四歲風氣順行。五歲〈行〉「九」神不戰、妖惡伏滅。六歲而究著六紀。七歲乃三光更明。八歲而恩究達八方。九歲陰陽俱悅。十歲萬物悉各(得)其所。爲數小終、物因而三合之、乃天地人備、故三十歲而太平。今上皇氣出、眞道至、以理十年小太平也。如力行眞道二十歲而中太平者、乃謂帝王〈已〉「以」下乃臣民大小、按行眞道、共卻邪僞也。

【校勘】

『太平經合校』國不可勝數訣第一百二十九

- 請問神人、天下凡有幾國…經「請問一事、平道之、願聞天下凡有幾國」
- 遠出列洞虛無表…經「乃遠出到洞虛無表」
- 竝合三部爲萬二千國、皆稟受太平之教…經「合三部爲萬二千國」
- 『太平經合校』敬事神十五年太平訣第一百四十
- 今太平一歲、人爲喜樂順善…經「太平一歲、人爲其喜樂順善」
- 二歲地上爲大樂…經「二歲、地上爲其大樂」
- 三歲恩澤究洽於天下…經「恩澤究竟於天」
- 五歲行神不戰…經「五歲、九神不戰」
- 六歲而究著六紀…經「而究著六綱」
- 十歲萬物悉各其所…經「十歲、萬物悉各得其所。」
- 故三十歲而太平…經「故三十歲而太平也」
- 眞道至、以理十年小太平也…經「眞道至以治、故十五年而太平也。」
- 如力行眞道二十歲而中太平者、乃謂帝王已下乃臣民大小、按行眞道、共卻邪僞也…經「如不力行眞道、安得空致太平乎？此十五歲而太平者、乃謂帝王以下及臣大小、案行眞道、共卻邪僞」

【書き下し文】

請いて神人に問う、「天下凡そ幾くの國有らんや」と、「然り、中部は八十一域、次に其の外は復た一周し、天下に萬國有り、遠出し洞虚の無表に列（いた）れば、三部を併合し萬二千國と爲す。皆な太平の教を稟受す。今 太平一歳となれば、人 喜樂して善に順うものと爲る。二歳となれば地上は大樂と爲る。三歳となれば、恩澤 天下に究洽す。四歳となれば、風氣順行す。五歳となれば九神戦わず、妖惡は伏滅す。六歳となれば六紀を究著す。七歳となれば乃ち三光明かりを更たむ。八歳となれば、恩 八方に究達す。九歳となれば陰陽俱に悦ぶ。十歳となれば、萬物悉く其の所を得。數ふること小終と爲れば、物因りて之を三合し、乃ち天地人備わる。故に三十歳にして太平たり。今上皇の氣出で、以て十年を理むれば、小太平なり。如し眞道を力行して二十歳にして中太平となれば、乃ち帝王以下、臣民大小、按じて眞道を行い、共に邪僞を卻くと謂う」と。

【現代語訳】

神人に教えを請います。「天下にすべて幾つの國がありますか」と。「よからう。中央は八十一域、次にその外にまた一周があり、天下に萬國があり、遠出して洞虚でありながら表の無いところにいたれば、それらの三つの部分を併合して萬二千國とする。どこも太平の教を享受している。今（ところで）、太平が一歳続くと、人はよろこんで善を順う。二歳が続くと、地上は大樂になる。三歳が続くと恩澤が天下にあまねく行きとどく。四歳続くと風氣が順行となる。五歳が続くと四時五行の九神が戦わず、妖悪はすべて伏滅する。六歳が続くと、六親がみな顕達する。七歳が続くと日月星の三光が更に明るくなる。八歳が続くと恩澤は八方にゆきわたる。九歳が続くと陰陽とも喜ぶ。十歳が続くと萬物は悉くそれぞれ居場所をえる。歳數が一區切りついたので、物はそれによってこれを三合し、それで天地人が備わる。だから三十歳は太平となる。今 上皇の氣が出て、眞道が至り、それによって十年をおさめると小太平となる。もし眞道を力行すること二十歳となれば中太平となる。それはすなわち帝王以下すなわち臣民がすべて、よくわきまえて眞道を行い、共に邪偽をしりぞけるからである」と。

【注釋】

○中部八十一域

『太平經命梭』萬二千國始火始氣訣第一百三十四「天下共日月、共斗極、一大部乃萬五千國、中部八十一域、分爲小部、各一國」。

○洞虚

『太平經』卷八十九八卦還精念文第一百三十三「道以自然爲洞虚、無一旦自來、其道仁良」。

○風氣

『論衡』謹告「身中病、猶天有災異也。血脉不調、人生疾病、風氣不和、歲生災異」。

○六紀

『白虎通德論』三綱六紀「三綱者何謂也？謂君臣・父子・夫婦也。六紀者、謂諸父・兄弟・族人・諸舅・師長・朋友也」。

『老子』18「六親不和、有孝慈」。

○行神

『太平經』卷七十一「出入往來、四時五行神吏爲人使、名爲眞道、可降諸邪也」。

○上皇氣

『太平經』卷六十六三五優劣訣第一百二「然、夫天地人本同一元氣、分爲三體、各有自祖始。故三皇者、其祖頭也。五帝者、其中興之君也。三王者、其平平之君也。五霸者、是其末窮劣衰、興刑危亂之氣也。」

【原文三】

神人語真人言、古始學道之時、神遊守柔以自全、積德不止道致仙、乘雲駕龍行天門、隨天轉易若循環。真人、專一老壽、命與天連。陽道積專、日有單。至信所致、無爭榮名、而居高官。孝順事師、道自來焉。神乃知善人與語言。夫師開矇爲道之端。君父及師、天下命門。能敬事此三人、道乃大陳。不事此三人、室閉無門、福德皆逃、禍亂爲憐。詳惟其事、無失書言。父母生之、師教其交、居「君？」親仕之、可不慎焉。

天下至士、去官就仙、仙無窮時、命與天連。長吏治民、仙吏天官、與俗何事、其事異焉。長吏治民、仙萬神。天下之事、各自有君。努力思善、身可完全。以是遂去、不負祖先。吾圖書已盡、無復可陳（可？）致勉學、詳請其文。神人將去、故戒真人。慎之慎之、亦無妄傳。不得其人、慎無出焉。藏之深淵、幽冥之間。道不飲血、無語要文。外內已悉、無可復言。

於此畫神人羽服、乘九龍輦昇天、鸞鶴小真陪從、彩雲擁前、如告別其人意。

【校勘】

『太平經合校』九十四至九十五己部九之十 闕題

異同なし。

【書き下し文】

神人 真人に語りて言う、「古 始めて道を學ぶの時、神遊して柔を守りて以て自ら全
い、積徳止まらずして道 仙に致し、乘雲駕龍して天門に行き、天に隨いて轉易して循環
の如し。真人よ、專一すれば老壽し、命は天と連ならん。陽道 專を積めば日に單有ら
ん。至信の致すところ、榮名を争う無きも高官に居る。孝順して師に事ふれば、道は自ず
と來たらん。神乃ち善人を知り、（彼）と語言す。夫れ師は道と為る端を開矇す。君父及
び師は、天下の命門なり。能く此の三人に敬事すれば、道乃ち大いに陳ぶ。此の三人に事
えざれば、室閉じて門無く、福德皆な逃げ、禍亂し憐れむこと爲る。詳しく其の事を惟
い、書言を失う無かれ。父母之を生み、師其の交を教え、親と居して之に事う、慎まざる
べけんや。

天下の至士は、官を去りて仙に就く。仙は時を窮むること無く、命は天と連なる。長吏は民を治め、仙吏は天の官たり、俗に何の事か與みせん、其の事異なる。長吏は民を治め、仙（吏）は萬神たり。天下の事は、各おの自ら君有り。努力して善を思わば、身は完全なるべし。是を以て遂に去れば、祖先を負かず。吾が圖書已に盡くし、復た陳すべき無し。勉學を致し、詳く其の文を請めよ」と。神人將に去らんとし、故に真人を戒む。「之を慎め之を慎め、亦妄りに傳うる無かれ。其の人を得ざれば、慎みて出すこと無かれ。之を深淵、幽冥之間に藏せよ。道 飲血せざれば、要文を語る無かれ。外内已に悉（つく）し、復た言うべき無し」と。

此に於て神人羽服にして、九龍の輦に乗りて昇天し、鸞鶴小眞陪從し、彩雲前に擁す。其の人に告別するが如きの意を畫く。

【現代語訳】

神人は真人にこう言った「昔、私は始めて道を學んだ時、神遊して柔を守り、自分をまっとうし、續けて徳を積みかさねて仙人になり、雲と龍に乗って天門に行き、天に従って循環のように變化した。真人よ、專一となれば長壽となり、命は天とならぶほどになろう。陽道は專一に蓄積すれば、日にあつくなくていくだろう。このうえない信心のもたらすことは、榮名をあらそうことなく、高官の地位につくのである。親孝行のように師につかると、道が自ら到達する。神は善人を知っているため、ともに話すことができる。

そもそも師は道の始まりとなるものを啓蒙する。君主と父親及び師匠は天下の命門である。この三人を敬い仕えれば、道は大きくくり廣げられる。この三人に仕えなければ、室門が閉鎖され、福德がすべて逃げ、禍亂が近づくので悲惨になる。詳しくこれを考えて、私の言葉を忘れないように。父母は子供を生み、師は（子供に）交わりを教える。父母と一緒にいながら師匠につかえるため、慎まなければならない。

天下の至人は、官職を捨てて仙人になろうとする。仙人は時を窮めることなく、壽命は天とならぶほどである。長吏は民を治めるが、仙吏は天官（の一人）であり、俗事と何の關係があるか。その従事することは異なっている。長吏は民を治めるが、仙人は萬神（の一人）であり、天下のことについて、それぞれの擔當する神君がいる。努力して善のことを考えれば、身は完全になることができる。このようにして遂に（世を）されば、祖先の期待に背かない。私の圖書は全て終わり、さらに言うことがない。勉學して詳しく文意を求めなさい。」と。神人は立ち去ろうとするところで、真人を誡めた。「慎みなさい慎みなさい、妄りに傳えてはいけない。正しい人にあわなければ、慎重にして教えを出してはいけない。それを深淵や暗い所に隠すように。道は歃血しなければ、重要な經文を語ってはいけない。内部と外部はすべてはつきりになっているので、さらに言う必要がない」と。

そこで神人は羽服をまとい、九龍の輦に乗って昇天するところ、鸞鶴と小真たちがつきそい、彩雲が前にかかり、その人に別れを告げているような光景を描いた。